『恨の介』の位相

山下久夫

1

近世初期恋物語の一般的形式は、まず「御伽草子」のそれを先蹤とする。「御伽草子」の典型は、たとえば『朝顔の露の宮』での「露の宮」と「朝顔」の恋の成立過程に示されている。「朝顔」の乳母「青柳」をなかだちとする恋文の依頼、「あら強顔（つれな）　貫く玉の　数ならぬ身にも情は　荒磯海　深き恋路に　沈み果て…」などとしてつづられる古歌的な情感、いくたびかの玉章の応答の後の恋の成就と、その後の古歌的情感の中での後朝の別れがそうである。「仮名草子」恋物語も基本的にはこれに依拠している。しかし、それは、同時に独自の形式をも産出しはじめている。「御伽草子」の場合、主人公の登場から後朝の別れに至るまでは、型どおりの経過に終始していた。『朝顔の露の宮』では、継子譚が核となっているが、むしろ、個々の作品の独自の世界が展開するのは、後朝の別れ以後であった。このような事情は、『横笛草子』や『秋の夜の長物語』でもほとんど変らない。しかし、「仮名草子」の場合は、事情を異にする。もちろん「仮名草子」の場合も、「御伽草子」と同様、後朝の別れ以降にも独自の世界を展開しないわけではない。『恨の介』では、主人公の恋死と女性の殉死を描いて見せ場をつくったので、この作品の創作意図は殉死を描くところにあるとも言われた。[注1]『露殿物語』にしても、花合方式による遊女評判までおり込んでいたことから、遊女評判記や諸分物の祖としての評価もうけてきた。しかし、「仮名草子」恋物語のもっとも顕著な特徴は、むしろ後朝の別れ以前にあらわれていた。すなわち「仮名草子」では、主人公の登場から懸想―なかだち―恋文―密会―後朝の別れの個々の場面が、きわめて強固な独立性を保持しながら、近世色豊かな描写を見せる。また、ある場面から他の場面へのへだたりが大きく、同時にその間隙をぬって、近世的な狂歌や道行きが挿入される。『恨の介』では、なかだちの「庄司の御家」を通じて「雪の前」の素姓が語られるが、そこでは秀次事件の詳細がみえる。『露殿物語』の場合は、「露

殿」と「東の君」とのなかだちに「香車」を登場させ、「露殿」との間に、遊客とのかけ引きが誇張して描かれたりもする。『是楽物語』の「友名」は、美文調の文体によってつづられた夢示現の世界で、女を見て恋病に陥るが、「御伽草子」の『秋の夜の長物語』の「桂海」などのように、ただちに現実的出あいが実現するわけではない。「友名」が夢中の女に出あうのは、はるか後の下巻である。この時間的へだたりは、「友名」をして、「やう〳〵今はハやしゐてわすれ給ふ折なる」などと言わせるほどである。そしてその間隙をぬうようなかたちで、「すりきり」あるいは「友名」の同伴者としての「ぬめり者」の「是楽」が、狂歌場面や道行き場面などの近世的見せ場を提供している。『ねごと草』でも、「余助」が「松風」を垣間見てから、女との出あいの間には、「金無」との発句でつづる道行きの挿入があった。『薄雪物語』では、恋文部分の拡大を指摘できよう。こうした「仮名草子」恋物語にみられる後朝の別れ以前の個々の場面の拡大は、「御伽草子」の恋物語とは明確に区別し得る「仮名草子」独自の形式をもたらした。『恨の介』にはじまる「仮名草子」の恋物語の変質過程も、このような事情によって理解することができる。『恨の介』の諸本は、代表的なものとしては、古活字本『恨の介』と、寛永整版本『うらみのすけ』とが存在するが、この両者の間にはかなりの変動がみられる。この変動の意味をその変質過程の中でさぐることも、「仮名草子」恋物語の展開を考える上では重要である。『恨の介』は、これまでモデル論や、その創作意図について論じられることが多かったが、[注2] これらの論も、「仮名草子」恋物語の変質過程の中に正確に位置づけられたとは言いきれない。

2

そも〳〵比はいつぞの事なるに、慶長九年の末の夏、上の十日の事なれば、清水の万燈とて、袖を連らねて都人、四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、げにおもし(マヽ)ろき有様なり。ここに葛の恨の介、夢の浮世の助、松の緑り介、君を思の介、中空恋の介とて、その比都に隠れもなく、色深き男どもあり、なかにも葛の恨の介と申せし人は、一段心細き者なりしが……

古活字本『恨の介』の主人公「恨の介」は、まず先行の「御伽草子」の世界にみられない享楽的な風俗描写を背景にして登場する。「一段心細き」主人公が、相手を求めて清水観音祈願に参詣するのであるが、享楽の色彩は、そこでも参詣の場を圧倒していた。妻を求めての清水祈願は、中世以来の俗信である。しかし、参詣の「恨の介」の周囲は、明らかにそれまでとは異なった様相を呈している。祈願の後、欄干に腰をおろし参詣人をながめる主人公の目にとびこんできたのは、「これよりすぐに豊国へ」、「いざや我等は祇園殿」、「北野へいざ行きて、国が歌舞妓を見ん」、「東福寺の橋にて踊らばや」、「五条にて慰まん」と、たがいに言いかわしながら参詣する道者たちの群であった。「恨の介」は、

その場を逃れて音羽の滝に立寄る。しかし、そこでも、「落ち来る水に盃を浮べ、さもいつくしき女房たち、又は若衆も打交り、手まづ遮る盃を、彼方此方と取り交し、遊山ばかりと聞えける」の酒宴風景に遭遇する。また、「夢の浮世をぬめろやれ、遊べや狂へ皆人」などという当時のはやり小歌さえ耳にする。「恨の介」をとりかこむ清水風景は、すでに信仰からは逸脱している。むしろ清水は、『枕草子』に擬した「物は尽し」の『犬枕』が、「したひ物」として「当世流行る伊達道具」「数寄屋の作事」とともに、「遊山見物」をあげていることからもうかがえるように、もう遊楽の場であった。これは近世初期の一般的な風潮でもあった。「慶長九年の末の夏」といえば、豊国大明神での秀吉の七周忌を八月十七日にひかえ、このあたりは、風流踊などをまじえてわきたっており、北野天満宮でも、「国が歌舞妓（ママ）を見ん」のことばに代表されるように、歌舞伎踊・勧進能・女房能などの興行が盛大をきわめていた。主人公「恨の介」は、まずこのような享楽的風俗を背景にする「色深き男」であった。これは、「御伽草子」の主人公たちとは明らかに異なる存在である。こころみに『朝顔の露の宮』の「露の宮」の登場風景を見てみるとよい。

昔桜木の大王とて、めでたき帝在します。后は萩の大臣の御女、菊の御前と申し侍る。この御腹に皇子三人在しける。第一の宮をば、糸桜の親王と申しき。第二をば、紅葉の宮と申し侍る。第三の宮は色殊に深く、詩歌管絃に長じ給ひ、御容貌心態に至るまで、花の都に双ぶ人もなし。この君を見参らする人は、上下によらず、露の御情にもと願ひ侍るにより、自ら御名を露の宮と申し侍る。

ここでは、「露の宮」の登場に、風俗描写をともなわせることはない。『横笛草子』の「滝口入道」や、『秋の夜の長物語』の「桂海」にしてもやはり同様であった。「恨の介」は、「露の宮」や「滝口入道」や「桂海」と類似の恋をする人物ではあるが、登場の仕方から見ても、「御伽草子」の主人公たちとは同一ではない。

「雪の前」もまた、田村堂で、「とても籠らば清水へ、花の都を見下して」、「とどろ〳〵と鳴神も、こゝは桑原」、「浜松の音はざゝん〳〵」などのはやり小歌を、「しどろもどろに歌いな」す「酒宴半ば」の遊興の中にあった。「雪の前」じしんも、「遊ばせしその琴を壁に背けて置かせられ、今様の三味線を転手きりりと押し廻し、糸を調べて甲を取り、合の手を置」いて享楽する女性であった。これも、『朝顔の露の宮』の「折節梅が枝の中納言の御女に、朝顔の上とて、なべてならず容貌よき姫君在しける。」とは相違する。

このように、享楽的な風俗を背景にした主人公の登場のあり方に、「仮名草子」恋物語のはっきりとした特徴がある。『朝顔の露の宮』や『秋の夜の長物語』によって構想された『露殿物語』の場合も、事情は同じであったと考えてよい。

しかし、古活字本『恨の介』の位相を定めようとするとき、もう一つの問題がある。それは、これまでもたびたび指摘されたよ

うに、『恨の介』の主人公たちが、反面では「御伽草子」の主人公たちと少しも違わぬ側面を保有していることである。たとえば「恨の介」が「雪の前」に送る恋文は、全面的に謡曲的情感や、『源氏物語』『古今集』などの古典的情感によって統一されているし、「恨の介」の遺書の構文も、『住吉物語』中の長歌の補綴でなっている。[注3]「雪の前」についても、その容姿の形容に端的にあらわれているとおりである。「物によく〳〵譬ふれば、唐の楊貴妃、摩耶夫人、虞子君、李夫人、星の宮……かの野宮に住み給ふ、御息所に葵の上、和泉式部・小式部、紫式部に小督の局、紀の有常が娘かや……」。これは、まぎれもなく『鉢かずき』や『十二段草子』などの美的形容である。作品全体を一貫する「恨の介」や「雪の前」のイメージも、むしろこうした側面であった。したがって古活字本『恨の介』の位相の評価も、この側面にかかっている。これまでのように、「仮名草子」そのものが中世的要素と近世的要素との混交として通念化されていた事情からは、この評価は不可能であった。しかし、こうした旧態をもちながらも、古活字本『恨の介』は、まぎれもなく近世初期文芸である。この位置づけを可能にするためには、この作品の旧態部分のはっきりとした近世文芸としての認定が必要である。

古活字本『恨の介』刊行の慶長〜元和期は、印刷技術の発達と普及の時期である。寺院の独占であった出版事業は、民間の開版によっても推進された。いわゆる町版の成立時期である。その特徴は、読者人口の増大をはかった仮名木活字版にあり、その享受者層は、没落公家や上層武士、あるいは古典的教養をもった上層町衆であった。これらの要請による古典版本化の時代でもあった。こうした条件の中で産出された嵯峨本の出版元では、謡本や舞の本なども印刷されたという。[注4]古活字本『恨の介』の内部構造の評価には、このような歴史事象の検討も不可避である。それは、『源氏物語』『伊勢物語』『徒然草』『枕草子』ほかの伝統文芸の享受が、上層町衆を中心として行われたという事実の評価である。この時、伝統文芸は、たんなる古典としてではなく、近世文学としてよみがえった。この時期の読書大衆にとって、伝統文芸の享受は、積極的な文学的行為であったと言ってよい。古活字本『恨の介』は、このように伝統文芸が、広範な享受行為にささえられて蘇生したところに書かれた文芸として理解されなければならない。つまりこのことは、「恨の介」が、「露の宮」や「滝口入道」や「桂海」の残像としてではなく、むしろ、伝統文芸の積極的な享受が産出した近世文芸の具体的な主人公だということである。詞章や情感が、たとえ伝統的な色彩をもっていたとしても、「恨の介」じしんは、「御伽草子」の人物とは異質の主人公であるということである。「雪の前」についても同様である。

すでに述べたように、「仮名草子」恋物語の特徴は、主人公の登場から後朝の別れまでの各場面の拡大にある。古活字本『恨の介』も、享楽風俗を背景に登場の主人公や、「庄司の御家」が「雪の前」を語るときにもり込まれた「なかだち」の部分（秀次事件の詳細）に特色を見出し得る。「恨の介」や「雪の前」の恋

文、二人の密会の模様の描写、これらは、いずれも「御伽草子」にはない近世色である。『恨の介』は、まぎれもなく「仮名草子」であった。しかも、ここでいっそう重要なことは、古活字本『恨の介』が、それらの場面で、伝統的詞章や情感を十分に生かしているという事実である。秀次事件にしても、伝統的な詞章や情感の中で、その緊迫感を伝えている。『恨の介』は、かつて実録物として、慶長十四年の烏丸光広以下数人の宮廷密通事件[注5]や、同じころの松平若狭守近次と禁裡女房との密通事件などに、そのモデルが求められたこともあった。そのことについての論はともかく、少なくとも当時話題の密通事件を、この一編の恋物語に表現し得た伝統的構文の積極的役割に注意しなければならない。森山重雄氏[注7]も言うように、『恨の介』は、「伝統的な物語の方法から脱却できない」作品としてだけではなく、この作品は、むしろ「当時の宮廷密通事件を物語化する原点を中世小説の様式に求めた」ものとして考える必要もあろう。古活字本『恨の介』は、秀次事件や宮廷密通事件のような近世初期の世俗を作品中にくみ込むことによって、「仮名草子」恋物語の資格を得た。伝統的詞章や情感は、その原点でもあった。「恨の介」や「雪の前」も、「御伽草子」の残像としてあったのではない。『恨の介』の作者は、「御伽草子」の主人公たちを蘇生させ、それを媒介とすることによって、当時の密通事件に代表される公家衆のイメージを鮮明にしたのである。そして、このことによって「恨の介」や「雪の前」は、「仮名草子」の主人公の地位を確保した。そして、この背景に、慶長～元和期にみられる伝統文芸の広範な享受と、その主人公たちの蘇生を見なければならない。

「恨の介」「雪の前」の登場にともなう享楽風俗の描写についても、別の観点が用意されなければならない。つまり、これまでのように、この風俗描写だけを近世的であるとすることはできない。「恨の介」や「雪の前」もまた近世的人物である。だからこそ、これらと享楽的風俗との結合も可能であった。両者は密着して形象化された独自の文学形象として理解すべきであろう。このような文学形象にあっては、その享楽風俗の描写のあり方は、むしろ伝統的側面の制約をうけていた。「雪の前」は、「今様の三味線を転手きりりと押し廻」すが、ただちに描写は「三味線の結構」におよび、「扨また胴の蒔絵には、都の内を蒔きにける。祇園・清水・賀茂・春日、六波羅・六角・今熊野、豊国の大明神、三十三間・大佛殿……」の洛中洛外の名所の羅列となった。これは、「雪の前」の美人形容などに見られる伝統的表現様式と相関する。「恨の介」をとりかこむ風俗描写についても同様である。古活字本『恨の介』の基軸をなす伝統的詞章や情感の蘇生は、没落公家や上層武士・上層町衆などの伝統文芸の積極的な享受を前提としてはじめて保障されるものであった。

3

古活字本『恨の介』を、「仮名草子」恋物語として特徴づける

一つに、秀次事件の詳細があったことは、すでに述べた。そこでは、伝統的詞章や情感の積極的な援用があった。また、この場面は、この作品の実録物的性格を印象づけていた。整版本『うらみのすけ』は、主人公の登場から「恨の介」の懸想あたりまでは、古活字本との間にさしたる相違もみられない。しかし、「なかだち」の部分以降は、様相を異にする。古活字本の「より〳〵の御評定ありて」は、整版本では、「より〳〵御評諚有ければ、御諚さる御事にて候へ兵、かうをなせば天の利有、義の道を御背き候はゞ、いかで御利運候べき、御思案あれと諫めけり」と改変される。「御評定」の内容が、「天の利」「義の道」と、道義的教義で修辞化されている。秀次が秀吉に対し、謀叛の意志なきを陳弁するくだりでも、古活字本の「色々陳じ」は、整版本では、「一は天の畏れといひ、一はぶめいのおそれといひ、冥の照覧おそれあり、心にやしんの候はゞ、いかでか是まで参るべきと、色々ちんじ玉へば」と、これまた「天の畏れ」「ぶめいのおそれ」「冥の照覧おそれ」の、道義的色彩にいろどられた修辞に変じている。秀次の妾たちの自害の場面は、女性の殉死にみる立場から重要視されるが、古活字本では、この場面は秀次の死骸に別れを告げる女たちの自害と、「おこぼの上臈」の辞世の句だけを載せている。一方、整版本は十人の女性の辞世を掲げた。「おこぼの上臈」の後を追って自害する女たちの有様の描写も、古活字本と整版本とでは趣を異にしている。[注8]

残りの姫たち御覧じて、「あら涼しの最期や」と、我も〳〵と御じがひをし給ふなり。この姫たちの有様を譬へん方も無かりけり。心の猛き武士も、これにはいかで勝らんと、貴賤上下をしなべてあはれと言はぬ人も無し（古活字版）。

残の上らう達、是を御覧じて、あら涼しのさいごやとて、我も〳〵と御じがひをし玉ふに、親めのとしたしきかた、又は年ごろめしつかひし、女子はしたに至るまで、むくろしがいに抱付、是は夢かや現かや、いかなる浮世に生れきて、かゝるうきめをみる事よ、かなしやつらや何事ぞ、我もつれて諸共に、しで三づの大河をも、召ぐし玉へ姫君とて、なきさけぶ其の声は、大けうくわんのごとく也、此ひめの有様、たとへんかたもなかりける、心なきゑびす共も、理や道理とて、きせん上下おしなべて、哀といはぬ人もなし（整版本）。

「なかだち」部分は、「庄司の御家」が「恨の介」に向って、「雪の前」の素姓を語るところである。秀次事件も、「雪の前」の父親木村常陸介の連座で、作品の中ではかなりの比重を占めるが、古活字本の場合、この部分も、伝統的詞章や情感で緊迫して描かれ、物語全体の構成とも調和していた。しかし、整版本になると、この部分は、「雪の前」の素姓を語るという本来の目的からかなり離脱し、作者の筆は、秀次事件での「より〳〵の御評定」の内容や殉死の「この姫たちの有様」や動作・表情におよぶ。これは、この部分の拡大であり、ドラマ化でもある。実録物的性格が薄れ、ストーリー全体の有機的構成も破壊されている。この現象は、恋文―密会の部分にいたって決定的となった。

古活字本での「恋文」は、全面的に謡曲の情感や『源氏物語』『古今集』などの古典的情感によって一貫していた。ただ「桂の如きの君なれば、飛び立つばかり思ひ寝の」という部分だけが、「当世投節」の「逢ひたさ見たさは飛び立つなァばかり、籠の鳥かやァな恨めしやん」によっていることに気づく程度であり、それも全文に及ぼす影響は少ない。しかし、整版本の場合では事情をまったく異にしている。整版本の場合は、まず全体にわたっての和歌の多出がめだつ。また、この部分は、『薄雪物語』の書簡体さえも連想させる。「雪の前」の返信も、和歌の羅列が中心であり、物語の展開のうえでも蛇足の感が強い。また、古活字本が、「されば神代の昔より、今末の世に至るまで、尽きせぬものは恋路なり」と言い、その例として『源氏物語』をはじめとする古典をあげるのに対し、整版本での展開の仕方は次のようである。

若もおなびきなきならば、今生にては身をけして、君の手馴し物となり、朝には八重の帯、召さるゝ小玉の帯となり、お腰の程に寄りそひて、くるり〳〵くる〳〵と、お腰にひやたと纏付、結びあはんと願ふ也。夕の床にしづまらば、この魂取分て、こんは褥や枕の下、蚕と身をなして、よな〳〵絶えず鳴きぬべし、はくは御寝のね乱の、枕にかゝるつくもかみ、元結と身をなして、くるりひっしとかみを巻、朝な夕なにはなれまじ、若又むなしく成るならば、六道四生の其内を、淀のよそへが水ぐるま、露ほろ〳〵の泪にて、くるくるざんぶ〳〵と、三づの川をもしたふべし

腰に寄りそって「くるり〳〵くる〳〵と、お腰にひやたと纏付」いたり、「元結と身をなして、くるりひっしとかみを巻、朝な夕なにはなれまじ」などと書きつづったりする。これは、遊女との間で交わされる痴話文に等しい。「雪の前」のような女性を相手の「恋文」ではない。「雪の前」を見そめた時点での「恨の介」は、けっしてこのような人物ではなかった。「庄司の御家」の手引きによって、「恨の介」が「雪の前」との密会に向かう場面にも変化がある。この部分もまた、整版本では一つの見せ場を提供している。この場面は古活字本では、「庄司の御家」が「恨の介」を「雪の前」の住居に案内した後、「雪の前」のいとこ「菖蒲の前」に後事を托して帰り、「恨の介」は、外で待つことになっているが、この待機の場面が、整版本では大きく変容する。

斯てうらみは物音をきき耳たて、すはや〳〵と思ひしに、ごとりとなりてちちめけば、うらみはまねくねずなぎかと、心うれしう思ひつゝ、そなたの方をみてあれば、それにてはあらずして、鼠のふうふたはぶれの、ちゝめくにおはしける、恨鼠にばかされて、腹立ぬると思へ共、又引替て我心、てんじかゆればめでたきぞ、それをいかにと申に、鼠のふうふのたはぶれに、必ちゝめく習有、我等もかれらにあやかりて、あふせの中とやがて有る、よるの被の新枕、暁かけてむつごとの、ちゝめきあはんずいさうを、かねてしらするうれしやと、今一人ぞ悦びける。

古活字本では、この部分は「その後(庄司の御家が帰った後)恨の

介耳を側め、御内の体を聞くに」とあるだけである。整版本では、「鼠ふうふのたはぶれ」を見て腹を立て、自分もあやかって、「雪の前」との「あふせの中」を連想する「恨の介」の心象描写にまで、筆がおよんでいることに注目したい。整版本の「うらみ」は、もはや宮廷密通事件の緊迫性とは無縁の人物である。伝統的な詞章や情感もここには見られない。

「雪の前」の屋敷での酒宴や、枕交中の部分は、改変というよりは新作の感が強い。また、そこでは、「恨の介」の変容に対応して「雪の前」も変容する。古活字本では、「恨の介」が「菖蒲の前」に案内されて屋敷に入り、「雪の前」と侍女の「紅」とを交えた四人で酒宴を催す場面を、「さてその後御張台には、雪の前殿、菖蒲の前、紅なり。恨の介と四人にて、御土器など回らされ、誠に情深くぞ見えにける。」と、ごく簡略に記述するのに対し、整版本では、この部分もかなりの相違を示す。「扨其後に御座敷にはあやめのまへ殿、紅殿、雪のまへ殿、扨うらみの介とは四人にて、御かはらけぞめぐりける」の記述の後、新たに酒宴の場をつくりあげる。しかもそこには、近世色のこい光景が展開する。「あやめ殿かれうびんがの御声にて、当世はやりける、りうたつぶしと思しくて、ぎんじ玉ひけるは、君が代はちよにや干世を重ねつゝ、岩ほと成りて苔のむすまでとありければ」、「天女のしやうがをあざむく御声にて、是もりうたつぶしを、色かをも思ひもいれず梅の花、常ならぬよによそへてぞみるとうたはれなければ、皆人申されけるは、紅殿は、常には小歌をも御口ずさみも候はぬに、妙なる御吟声やとぞほめられ……」。ここでは「菖蒲の前」も侍女の「紅」も、ともに当世流行の「隆達節」を吟じながら宴に興じる。「雪の前」もこの中にあって、自らも「雪のまへ殿さかなとて、君とわが久しき世々をたとふれば、空行く月のかぎりしられずと有りけれども、恥がはしくやおはしけん、声かすかにして、きくにたらずおはしけれども、あっとかんじたる計也」と、積極的に参加する。「近衛殿」の公家屋敷で行われているはずの酒宴は、いつのまにか傾城町でのそれに変じたかのようである。これらは、古活字本にはまったくない情感である。

枕交せの場面でも、同じことが指摘できる。「恨の介」が、「雪の前」の局で床入りを待つようすは、古活字本では、「恨の助思ふやう、思ひがけざる上人に、起臥一つ床にして、ま見え申さん恥しやと、心には思へども、余所へは出さざりけれど、外にや色の見えぬらむ。」と叙述するにとどまるが、整版本でのこの場面は、「斯てうらみの介が、よるの被もつねならず、一代一世の間にも、見きかざるしとねの上、はゞからじとは思へ共、天の冥加におされけん、おづ〳〵しとねへはい上り、足をちゞめて胸に手を置き、南無帰命とは思へ共、心にふかぬ風吹て、只じは〳〵としたりけり」とある。この描写は、きわめて具体的・写実的であり、その動作や表情も、古活字本での平面的叙述とはまったく異なったものになっている。「雪の前」も「恨の介」に、「こよひの月の入さの山にも、露やをくらんと有りければ、是はそもいかなる御言葉やらん」と問う。返事に窮する「恨の介」に、

「雪の前」は、ただちに「言のはによし有りて、桂男のまふでつつ、そなたの空にて申さんとて、御ざの上にぞうつ」とたたみかける。これは「恨の介」にとっては、「かく御情のなかりせば、むなしくよはをあかさなんと」の「あぶなき今夜のたはぶれ」であったし、「扨もひめの御心、やさしき事はかぎりなし」として明方まで「二世をこめ」て、「たがひにたはぶれ玉」うことになったのである。この部分も、古活字本では整版本のような具体的な描写や写実はない。古活字本では、ただ「よもすがらの物語、誠に驪山宮の私言、狂言綺語の睦言、天にあらば願はくは比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならむ。夢現とも辨へず、言葉に花ぞ咲きにける。」として、伝統的詞章や情感で統一されるだけであった。整版本でのこの部分の変化も、さきの場面と同様に、傾城町での情感への変容であった。

4

「仮名草子」恋物語の一般的特徴は、主人公の登場から後朝の別れまでの各場面が、近世的要素によって拡大化するところにある。古活字本『恨の介』は、そのことを伝統的詞章や情感の蘇生によって満たした。そのことによって形象化の「恨の介」「雪の前」であったからこそ、当時の秀次事件や宮廷密通事件の物語化さえも可能であったし、「恨の介」や「雪の前」も、「御伽草子」の主人公たちとは異なる「仮名草子」の主人公となり得た。古活字本『恨の介』の位相もここにあった。名所記・咄本・評判記などの出版の大勢を前にした整版本『うらみのすけ』は、もはや伝統的詞章や情感の蘇生だけでは、享受者の要求にこたえることはできなくなっていた。古活字本『恨の介』は、それなりの近世的風潮を取り入れていたとはいえ、少なくとも伝統的詞章や情感で、全体を統一することが可能であった。しかし、整版本では、それだけで時代の要求を満たすことは不可能であった。「なかだち」の部分も、「雪の前」の素姓紹介をはなれて、秀次事件だけでドラマ化しているし、恋文—密会の場面も、宮廷密通事件などとはまったく無縁の存在であった。そこには傾城町の様相が展開されもした。これは別趣の主人公の誕生にもつながる。整版本『うらみのすけ』には、異趣の主人公が同居していることになるが、「仮名草子」恋物語の推移の中で、しだいに前面におし出されてくるのは、恋文—密会場面で変容の主人公であった。反面、伝統的詞章や情感は後退する。『是楽物語』の「友名」も、本妻への貞節だてとして、女と二度と逢わない誓紙を書かされる。しかし、「友名」は、それをさけるために、「ミチのほとりにても、我しらず行あひ、行あひ奉るときの神ばつ」と強弁したり、肌を触れないとの誓紙を書くとは言っても、夜道で偶然触れ合うこともあるではないかなどと、「いとわりなきわび事」をする。こうした性格設定も、やはり整版本『うらみのすけ』の新しい主人公からの派生である。しかもこの側面が、狂歌や道行の流行の中で、コメディアン「是楽」との結合を可能にする。伝統的詞章や情感

とともにある「友名」は、夢示現での女との出あい部分だけに名残をとどめるだけである。『ねごと草』の、「松風」を垣間見た「余助」も、「金無」との道行きには、別の顔をのぞかせているが、垣間見の世界は、「これぞ世話にいふなる、春の夜のあだ夢ならん」の邯鄲の夢に後退する。こうして整版本『うらみのすけ』以後の「仮名草子」は、もはや恋物語という形だけでは全体の構成を保つことはできなくなる。そして、そこには新たな「浮世草子」の主人公たちが胎動をはじめるのである。（未完）

注1　田中伸「『うらみのすけ』の発想をめぐって」（『仮名草子の研究』所収）。

2　松田修『うらみのすけ』をめぐって――仮名草子から浮世草子――」（『国語国文』昭和三十年十二月号）。日本古典鑑賞講座『御伽草子・仮名草子』所収「恨之介」解説（野間光辰）。田中伸、前掲書。

3　市古貞次「近世初期小説の一性格」（『国語と国文』昭和二九年四月号）。

4　京都の歴史第四巻『桃山の開花』第六章第二節参照。

5　松田修、前掲書。

6　野間光辰、前掲書。

7　森山重雄「近世における「書く」意識の生成」（『近世文学の溯源』所収）。

8　田中伸、前掲書。